



Title	【定年退職教授の履歴および主要業績】 ヴォルフガング・シュヴェントカー教授
Author(s)	
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2019, 45, p. 177-181
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71840
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【定年退職教授の履歴および主要業績】

ヴォルフガング・シュヴェントカー 教授

ヴォルフガング・シュヴェントカー (Wolfgang Schwentker) 教授

1979 年	デュッセルドルフ大学文学部歴史学科にて国家卒業試験合格
1980 年	同大学にて博士課程入学
1986 年	同大学にて博士号取得
1996 年	大学教授資格取得 (Habilitation)
1979-84 年	デュッセルドルフ大学史学科Ⅱ マックス・ヴェーバー全集研究室 研究員
1985 年	ドイツ歴史研究所 (ロンドン) 研究員
1986-89 年	デュッセルドルフ大学史学科Ⅱ 現代史学 講師
1989-91 年	アレクサンダー・フォン・フンボルト財団と日本学術振興会の奨学金 立教大学 客員研究員
1991-92 年	オックスフォード大学セント・アントニーズ・カレッジ 客員研究員
1992-96 年	デュッセルドルフ大学史学科Ⅱ 現代史学 講師
1995 年	プラハ カレル大学 客員教授
1996 年	デュッセルドルフ大学近現代史学 講師 (2002 年 9 月まで)
1996 年	デュッセルドルフ大学近現代史学 代行教授
1996-98 年	ハーゲン通信大学現代西洋史学 代行教授
1999 年	ビーレフェルト大学大学院 客員研究員
2000 年	エッセン大学現代西洋史学 代行教授
2002 年	ウィーン大学経済・社会史研究所 客員研究員
2002-07 年	大阪大学大学院人間科学研究科 准教授 (比較文明学)
2007 年	大阪大学大学院人間科学研究科 教授 (比較文明学) 現在に至る
2009 年	コンスタンツ大学文化科学科 招聘客員研究員
2018 年	レーゲンスブルク大学 招聘客員教授
2019 年	大阪大学定年退職 (予定)

ヴォルフガング・シュヴェントカー教授は、1979 年夏にデュッセルドルフ大学の国家卒業試験合格後、1979 年 1 月から 1984 年までデュッセルドルフ大学史学科マックス・ウェーバー全集研究所で研究員に任用され、1985 年にロンドンのドイツ歴史研究所に移籍、1986 年デュッセルドルフ大学にて博士号を取得、その後同大学史学科講師、1989 年から 1991 年まで立教大学客員研究員を経た後、1 年間オックスフォード大学セント・アントニーズ・カレッジの客員研究員に採用された。1996 年デュッセルドルフ大学で大学教授資格請求論文を提出。1996 年から 2002 年までドイツ国内の大学およびヨーロッパの大学 (ビーレフェルト大学、ウィーン大学、プラハ大学等) で客員教授を務めた。2002 年 10 月大阪大学人間科学研究科准教授に

着任、2007年に同研究科教授に昇任、2019年3月31日限り定年退職するものである。

シュヴェントカー教授は、大阪大学人間科学部および人間科学研究科において、基礎人間科学講座に着任以来、比較文明学研究室で思想史分野を専門とし、長年にわたり多くの学生の指導に力を注いできた。同教授の指導の基本方針は、大きく二つであった。一つは、学部学生、院生、多くの留学生に政治思想と社会思想の代表的人物、とりわけマックス・ウェーバー、カール・マルクス、丸山眞男、ハンナ・アーレントやノルベルト・エリアスの著作品に慣れ親しんでもらうこと、もう一つは、講義やゼミで、人間、思想、慣習等をめぐる異文化の理解とそれらの変容の根底にある問題を日本と西洋双方の視座から示すことであった。同教授が大学という学術的な教育の場で最も重要視したのは、社会や政治のさまざまな場面で大きな影響力を発揮する思想の特性を紹介し、学生たちに会得させることであった。

シュヴェントカー教授は、大阪大学人間科学研究科に在職中に、多くの研究プロジェクトに携わってきた。とりわけ、日本でのマックス・ウェーバーの受容についての研究があげられる。2013年にはこの研究成果をまとめた大著『マックス・ウェーバーの日本—受容史の研究 1905-1995』(みすず書房)が刊行された。他に『コンフリクトの人文学』をテーマにしたCOEプロジェクトのメンバーの一員を務めた。また三菱財団の助成を受け、日本人学生と共同研究で経済学者福田徳三の書簡を精査し書籍化した。さらには稲盛財団の助成制度で、日独共同研究者と共に近現代日本の歴史思想を紹介する編集本をドイツで出版するなど、精力的に研究に励んできた。最近では、日本学術振興会の科学研究費助成事業により、桑田熊蔵に焦点を当て研究に取り組んできた。桑田熊蔵は、明治末期から大正時代の社会政策者として偉業を成し遂げた人物であるが、日本ではほとんど名が知られてこなかった存在である。海外活動では、現在ドイツ語で20巻刊行されている『新・世界史』シリーズの編集部委員を2012年から務め、重要な役割を果たしている。これと関連して、文学部の秋田茂教授が率いる「グローバル・ヒストリー」の共同研究者としても活躍した。

大阪大学に在職した17年間、シュヴェントカー教授は多くの会議やシンポジウムの開催に積極的に貢献してきた。故木前利秋教授と共同で開催した「マックス・ウェーバーと東アジア」シンポジウムや「知識人と冷戦の終焉」、「近代化の多元性」などの国際会議を取り仕切り、さらに日独の公共機関からの依頼を受け、ベルリン＝ブランデンブルク科学アカデミーで日独文化交流史の会議開催に携わるなど、学内のみならず、海外においても研究の成果を発揮してきた。

学外および海外での活動については、ドイツのメディア、特にラジオを通して日本の歴史や文化の紹介に寄与してきたことが挙げられる。また、ドイツの美術館で日本文化の特設展示に協力するなど、海外における日本文化の普及に大きな役割を果たしてきた。公的・私的なドイツ語圏研究機関から所見の提供を求められる機会が多く、この面でも長年にわたり専門家として貢献してきた。また同教授は数多くの海外の専門誌や全集などの共同編集者としての活動にも力を注いだ。例えば、「Max Weber Studies」(ロンドン)、「International Political Anthropology」(ミラノ・ケンブリッジ)、「Edition Weltregionen」(ウィーン)などがあげられる。

学内においては、シュヴェントカー教授は多くの委員を歴任し、中でも国際交流関連の委員として貢献してきた。特にドイツ語圏の大学と大阪大学間のコンタクトパーソンを務め、長く貢献してきた。また論文博士受理検討委員を歴任のほか委員長も務め、安全衛生委員の一人としても貢献した。

以上のようにシュヴェントカー教授は、大阪大学および人間科学研究科・人間科学部における教育、研究、運営の発展に尽力してきたのみならず、専門分野での信頼も厚く、さまざまな場面で活躍してきた。特に海外と日本の架け橋役としての貢献には、大きなはたらきがあった。

主 要 業 績

著書

1. *Konservative Vereine und Revolution in Preußen 1848/49. Die Konstituierung des Konservativismus als Partei.* Droste 1988 (単著)
2. マックス・ウェーバーとその同時代人群像 . ミネルヴァ書房 1994 (編集者)
3. *Die Samurai.* Beck 2003 (単著)
4. *Megastädte im 20. Jahrhundert.* Vandenhoeck & Ruprecht 2006 (編集者)
5. マックス・ウェーバーの日本-受容史の研究、1905-1995. みすず書房 2013 (単著)

他

学術論文

1. Die Japan-Studien Emil Lederers. 『立教経済学研究』 第 44 号、1991 年、107-127
2. Karl Löwith und Japan. In: *Archiv für Kulturgeschichte* 76 (1994), S. 415-449
3. The Spirit of Modernity: Max Weber's "Protestant Ethic" and Japanese Social Sciences. In: *Journal of Classical Sociology* 5,1 (2005), p. 73-92
4. 「グローバル化と歴史学」『西洋史学』 第 224 号、2006 年、p. 265-281
5. 「トーマス・マンから「日本への新年挨拶」1947-1954」. 『りずむ』 第 6 号、2017 年、p. 3-19

他